

門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

第12回 記憶の中の戦中、戦後

昭和13年(1938年)成田山新勝寺では開基一千年祭が行われ、参道の商店や旅館はあふれる人並みで活気に満ちていた。しかし、その前年に始まった日中戦争を皮切りに、日本は戦争の時代に突入し、その影響は徐々に門前町の風景を変えていった。

新勝寺の参詣客は講中と呼ばれる信徒の団体が中心で、護摩札の願文は「家内安全」「病気平癒」「大漁祈願」などが主であったが、開基一千年祭のころからは「武運長久」が加わり、次第に個人客の割合が増えていった。特に昭和18年(1943年)ごろからは、講中を凌ぐほど、出征兵士やその家族が訪れるようになった。講中は正月・5月・9月のお参り月にやってくるが、武運長久を願う人々は時期を選ばず、参道の旅館は物資や食料が不足する中、さまざまな工夫を凝らしてこれらの客を迎え入れた。旅館の夕食には刺身と天ぷらがついたが、戦争中は刺身になる魚を入手することが困難で、旅館によっては生簀^{いけす}や庭の池にカモチン(雷魚)を飼っていた。魚田丸家旅館では板前も番頭も徴兵されたため、旦那が慣れぬ手で生簀の魚を刺身にしていた。若松旅館では畑を作り、おかみさんが貴重な油で玉ネギの天ぷらをあげて客に出した。家族は昼食に芋がゆや、フスマとうどん粉を混ぜて焼いた代用食を食べることも多かったが、出征を控えて祈願に来る若者を精一杯もてなした。

新勝寺山門前の蓬莱閣ホテルは霞ヶ浦海軍病院の分院として使用されていたが、戦局も押し詰まる昭和20年3月ごろからは、隣接する佐野屋、若松、魚田丸家などの旅館も傷病兵の受け入れ先になっていった。どこの旅館でも2階・3階の全部の部屋に布団が敷き詰められ、館内は白い着物を着て戦闘帽をかぶった兵士であふれた。若松旅館で生まれ育った鈴木(旧姓土井)初子さん(大正15年生まれ)によると、家には看護婦が2人いて傷



荒木照定大僧正を囲むGHQの将校と門前町の女性たち(昭和21年4月16日新勝寺中庭で)(鈴木(旧姓土井)初子さん提供)

病兵の面倒を見ていた。兵士はみな痩せ細り、空腹に耐えかねていたようだった。あるとき宿直の看護兵が寝たあと、お母さんが初子さんのためにいってくれた落花生を兵士に分けてあげたことがあった。戦後この兵士が「あのときの落花生が忘れられない」とお礼の品を持って旅館を訪ねてきたという。

終戦になるとすぐに傷病兵はいなくなり、旅館の人々はノミやシラミと戦いながら部屋の大掃除にとりかかった。佐野屋で生まれ育った鈴木博之さん(大正4年生まれ)によれば、昭和20年9月に復員したときにはすでに兵士の姿はなく、家ではお得意さんに旅館再開の手紙を出しはじめていた。昭和21年の正月には講中の客も戻り、また戦地から引き揚げた人々のお礼参りも増えて、町はまた活気を取り戻したという。お客さんは一食につき8勺^{しゃく}の米を持参したが、それをきっちり出していることを見せるために8勺どんぶりを作り、盛り切りでご飯を出した。大野屋には米軍機落下物回収のためにGHQから派遣された軍人が滞在していた。寄木細工の床の洋間で、彼らはレコードを回しよくダンスパーティーを開いていた。

新勝寺にも戦後の波はやってきた。昭和21年4月21日、GHQの3人の将校が寺を訪れた。当日は訪問着で着飾った町の若い女性たちがお茶を出し、お琴で「千鳥」を奏でて彼らをもてなした。当時の荒木照定大僧正は寺を守るために渾身の力で米軍人に向き合った。夕食を終え将校が帰ったあと、疲労で動けなくなった大僧正が2人のおつぎ(お世話係)に抱きかかえられて部屋に戻る様子を、今も鮮明に思い出すと鈴木初さんは語る。

町も寺も戦争を生き延び、門前町は国際空港開港という次の時代を迎える。こうして先人の築いた礎の上で、人々は日々新しい門前町を生きていく(完)。 (久保田滋子)

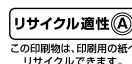
編集後記

昨年の8月15日号から連載を開始した「門前町に生きる」ですが、今回で連載を終了します。ご愛読いただき、ありがとうございました。成田山新勝寺の門前町として栄えてきた成田市。その伝統や文化を守り、伝え続けてきたそこに生きる人々の生活の一端がうかがえたのではないかと思います。なお、8月15日号からは、また新たな連載が始まります。どうぞお楽しみに。

平成27年7月15日号 No.1295

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。